幸田露伴
樋口一葉集

日本文学全集　3

筑摩書房

日本文学全集 3　幸田露伴　樋口一葉　集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　幸田露伴　樋口一葉

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

幸田露伴集　目次

風流仏　一
一口剣　三六
五重塔　五〇
二日物語　一〇〇
運命　一一七
平将門　一八四
観画談　二一九
骨董　二三四
幻談　二五一
雪たゝき　二六七
連環記　二九六

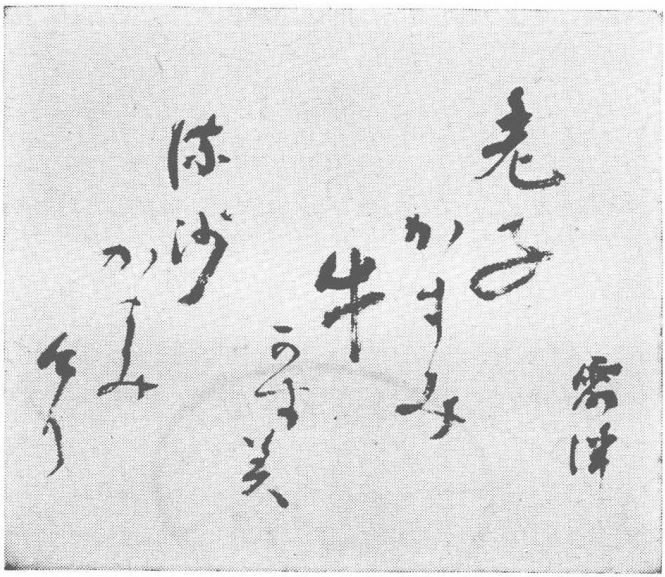
樋口一葉集　目次

うもれ木　三四三
雪の日　三六〇
大つごもり　三六三
ゆく雲　三七二
にごりえ　三八一
十三夜　三九九
たけくらべ　四一
わかれ道　四三七

年譜　四六
人と文学
幸田露伴　中野好夫　四六〇
樋口一葉　和田芳恵　四七六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

幸田露伴集


老子
牛
陳抱

風流仏

発端　如是我聞

上　一向専念の修業幾年

三尊四天王十二童子十六羅漢さては五百羅漢までを胸中に蔵めて鉈小刀に彫り浮かべる腕前に、運慶も知らぬ人は讃歎すれども鳥仏師知る身の心恥かしく、其道に志す事深きにつけておのが業の足らざるを恨み、爰日本美術国に生れながら今の世に飛騨の工匠なしと云はせん事残念なり、珠運命の有らん限りは及ばぬ力の及ぶ丈ヶを尽してせめては我が好の心に満足さすべく、且は石膏細工の鼻高き唐人めに下目で見られし欝憤の幾分を晴らすべしと、可愛や一向専念の誓を嵯峨の釈迦に立し男、齢は何歳ぞ二十一の春。是より風は嵐山の霞をなぐつて腸を断つ誹諧師が、蝶になれなれと祈る落花のおもしろきを眺むる事なくて、見ぬ天竺の何の花彫りかけて永き日の入相の鐘にかなしむ程凝り固つては、白雨三条四条の塵埃を洗つて小石の面はまだ乾かぬに、空さりげなく澄める月の影宿す清水に、瓜浸して食ひつゝ歯牙香と詩人の洒落る川原の夕涼み快きをも余所になし、徒らに垣をからみし夕顔の暮れ残るを見ながら百檀の切り屑蚊遣りに焼きて、是も余徳とあり難がるこそおかしけれ。顔の色を林間の紅葉に争ひて酒に暖めらるゝ風流の仲間にも入らず、硝子越しの雪見に昆布を蒲団にしての湯豆腐を粋がる徒党にも加はらねば、まして島原祇園の艶色には横眼遣ひ一ートつせず、おのが手作りの弁天様に涎流して余念なく惚れ込み、琴三味線のあぢな小歌は聞きもせねど、夢の中には緊那羅神の声を耳にするまでの熱心、あはれ毘首竭摩の魂魄も乗り移らでやあるべき。かくて三年ばかり浮世を驀直に渡り行きければ、勤むるに追付く悪魔は無き道理、殊さら幼少より備つての稟賦、雪をまろめて達摩を作り、大根を斬りて鷲の形を写しゝにさへ屢人を驚かせしに、修業の功を積し上奮発の勇を加へしなれば、冴し腕は愈ゝ冴へ、鋭き刀は愈鋭く、七歳の初発心二十四の暁に成道して師匠も是までなりと許すに、珠運は忽ち思ひ立ち独身者の気楽さ、親譲りの家財を売つてのけ、いざや奈良鎌倉日光に昔の工匠が跡訪はんと少し計の道具を肩にし、草鞋の紐の結ひなれで度ゝ解くるを笑はれながら、

物のあはれも是よりぞ知る旅。

下　苦労は知らず勉強の徳

汽車もある世に、さりとては修業する身の痛ましや、菅笠は街道の埃に赤うなつて肌着に風呂場の虱を避け得ず、春の日永き畷に疲れては蝶うら〳〵と飛ぶに翼羨ましく、秋の夜は淋しき床に寝覚めて隣りの歯ぎしみに魂を驚かす。旅路のなさけなき事、風吹き荒み熱砂顔にぶつかる時、眼を閉ぎてあゆめば、邪見の喇叭気を注けろがら〳〵の馬車に胆ちゞみあがり、雨降り切りては新道のさくれ石足を嚙むに生爪を剝して悩むを、胴慾の車夫法外の価を貪り、尚も並木で五割酒銭は天下の法だとゆする、仇もなさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲団に襟首さむく、待遇は冷な平の内に蒟蒻黒し。珠運素より貧きには馴れても、加茂川の水柔らかなる所に生長て、初て野越え山越えのつらさを覚えし草枕、露に湿りて心細き夢おぼつかなくも馴れし都の空を遠るに、無残や郭公待もせぬ耳に眠りを切つて破れ戸の罅隙に、我は顔の明星光りきらめくうら悲しさ、或は柳散り桐落て無常身に染る野寺の鐘、つく〳〵生命は森を縫ふ稲妻のいと続き難き者と観ずるに付ても志願を遂ぐる道遠しと、意馬に鞭打ち励ましつ、漸く東海道の名刹古社に神像木仏梁欄間の彫りまで見巡りて鎌倉東京日光も見たり、是より最後の楽は奈良じやと急ぎ登り行く碓氷峠の冬最中、雪たけありて裾寒き浅間下ろしの烈しきにめげず臆せず、名に高き和田塩尻を藁沓の底に踏み蹂り、木曾路に入りて日照山、桟橋寝覚後になし須原の宿に着にけり。

第一　如是相

書けぬ所が美しさの第一義諦

名物に甘き物ありて、空腹に須原のとろゝ汁殊の外妙なるに、飯幾杯か滑り込ませたる身体を此儘寝さするも毒とは思へど為る事なく、道中日記注け終ひて、のつそつしながら煤びたる行燈の横手の楽書を読めば、山梨県士族山本勘介大江山退治の際一泊と禿筆の跡。さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口しての御わざくれ、おかしき計りかあはれに覚えて、初対面から膝をくづして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を烘り、つくねんとして櫓の上に首投かけ、うつら〳〵となる所へ此方をさして来る足音、しとやかなるは踵に亀裂きらせしさき程の下女ならず。御免なされと襖越しのやさしき声に胸ときめき、為かけた欠伸を半分嚙みて何とも知れぬ返辞をすれば、唐紙するすると開き丁寧に辞義して、冬の日の木曾路、嘸や御疲に御

座りませうが、御覧下され是は当所の名誉花漬、今年の夏のあつさをも越して今降る雪の真最中、色もあせずに居りまする梅桃桜のあだくらべ、御意に入りましたら陰膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土産に、と心憎き愛嬌言葉、商買の艶とてなまめかしく、売物に香を添ゆる口のきゝぶりに利発あらはれ、世馴れて渋らず、さりとて軽佻にもなきとりなし、持ち来りし包静にひらきて二箱三箱差し出す手つきのしほらしさに、花は余所になりてうつゝなく覗き込む此方の眼を避けて背向くる顔、折から隙間洩る風に燈火動きて明らかには見えざるにさへ隠れ難き美しさ。我折れ深山に是は何物。

第二　如是体

粋の父の子実の母の子

見て面白き世の中に聞て悲しき人の上あり。昔は此京にして此妓ありと評判は八坂の塔より高く、其名は音羽の滝より響きし室香と云へる芸子ありしが、さる程に地主権現の花の色盛者必衰の理をのがれず、梅岡何某と呼ばれし中国浪人のきりゝとして男らしきに契を込め、浅からぬ中となりしより、他の恋をば贔負にする客もなく、よぶ人の絶ゑになるにつけても、よしやわざくれ身は朝顔のと短き命捨撥にしてからは、恐ろしき者にいふなる新徴組何の怖い事なく、三筋取つても一筋心に君さま大事と、時を憚り世を忍ぶ男を隠匿し半年あまり、苦労の中にも助る神の結び玉ひし縁なれや、嬉しき情の胤を宿して帯の祝ひ芽出度悦びしが、舒びし眉間に忽ち皺の浪立て騒がしき鳥羽伏見の戦争。さても方様の憎い程の気強さ、爰なり丈夫の志を遂ぐるはと、一ト群の同志を率ゐて官軍に加はらんとし玉ふを、止むるにはあらねど生死争ふ修羅の巷に踏入りて、雲のあなたの吾妻路、空寒き奥州にまで、帰る事は云はずに旅立玉ふ離別には、是を出世の御発途と義理で暁して雄雄しき詞を、口に云はする心が真情か、狭き女の胸に余りて案じ過せば潤む眼の、涙が無理かと、粋ほど迷ふ道多くて自分ながらに思ひ分たず、うろ〳〵する内日は消て愈〻となり、義経袴に男山八幡の守くけ込むで愚なと笑片頬に叱られし昨日の声はまだ耳に残るに、今、今の御姿はもう一里先か、ヱヽせめては一日路程も見透したきを役立ぬ此眼の腹立しやと、門辺に伸び上りての甲斐なき繰言それも尤なりき。

一ト月過ぎ二タ月過ても、此恨綿〻ろう〳〵として、筑紫琴習ふ隣家の妓がうたふ唱歌も我に引き較べて絶ゆる事なく悲しきを、コロリン、チャンと済して貰ひ度しと無慈

悲の借金取めが朝に晩にの掛合、返答さへも力無や、男松を離れし姫蔦の、斯も世の風に嬲らるゝ者かと俯きて、横眼に交張りの袋戸に広重が絵見ながら、悔しいにつけてゆかしさ忍ばれ、早う帰つて下されと独言口を洩るれば、利足も払はず帰れとはよく云へた事と吠付れ、アヽ大きな声して下さるな、あなたにも似合はぬ、と云ひさして、御腹には大事の〳〵我子ではない顔見ぬ先からいとしうてならぬ方様の紀念、唐土には胎教といふ事さへありてゆるがせならぬ者と或夜の物語りに聞しに此ありさまの口惜と腸を断つ苦しさ。天女も五衰ぞかし、玳瑁の櫛、真珠の根掛いつか無くなりては華鬘の美しかりける俤とゞまらず、身だしなみも懶くて、光ると云はれし色艶屈托に曇り、好みの衣裳数々彼に取られ是に易へては、着古しの平常衣一つ、何の焼かけの霊香薫ずべき。泣き寄りの親身に一人の弟は、有つても無きに劣る賭博好き酒好き、落魄て相談相手になるべきならねば頼むは親切な雇婆計り、あぢきなく暮らす中、月満て産声美しく玉のやうな女の子、辰と名付られしはあの花漬売りなりと、是も昔は伊勢参宮の御利益に粋といふ事覚へられしらしき宿屋の親爺が物語に、珠運も木像ならず、涙掃つて其後を問へば、御待なされ、話しの調子に乗つて居る内、炉の火が淋しうなりました。

第三　如是性

上　母は嵐に香の迸る梅

山家の御馳走は何処も豆腐湯波干鮭計りなるが、今宵はあなたが態々茶の間に御出掛にて、開化の若い方には珍らしく此爺の話を冒頭から潰さずに御聞なさるが快ければ、夜長の折柄お辰の物語を御馳走に饒舌りませう、残念なは去年ならばもう少し面白くあはれに申し上て軽薄な京の人、イヤ是は失礼、優しい京の御方の涙を木曾に落させやう者を、惜しい事には前歯一本欠けた所から風が洩つて此春以来御文章を読も下手になつたと、菩提所の和尚様に云はれた程なれば、ウガチとかコガシとか申す者は空抜にしてと断りながら、青内寺煙草二三服馬士張りの煙管にてスパリスパリと長閑に吸ひ、無遠慮に帽さし焼べて舞立つ灰の雪袴に落ち来るをぽんと擲きつ、どうも私幼少から読本を好きました故か、斯いふ話を致しまするとに図に乗つておかしな調子になるそうで、人我の差別も分り憎くなると孫共に毎度笑はれまするが、御聞づらくも癖なれば癖ぞと御免なされ。

さてもそののち室香はお辰を可愛しと思ふより、情には

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

鋭き女の勇気をふり起して昔取つたる三味の撥再び握つても、色里の往来して白痴の大尽、生な通人めらが間の周旋、浮れ車座のまはりをよくする油さし商売は嫌なりと、此度は象牙を柊に易へて児供を相手の音曲指南、芸は素より鍛錬を積たり、身持は淫ならず、且は我子を育てんといふ気の張あれば、おのづから弟子にも親切あつく、良い御師匠様と世に用ゐられて爰に生計の糸道も明き、細いながら炊煙絶せず安らかに日は送れど、稽古する小娘が調子外れの金切声、今も昔わーワッとお辰のなき立つ事の屢なるに胸苦しく、苦労ある身の乳も不足なれば、思ひ切つて近き所へ里子にやり、必死となりて稼ぐありさま、余所の眼にさへ是を見て感心なと泣きぬ。それにつれなきは方様の其後何の便もなく、手紙出そうにも当所分らず、まさかに親子笈づるかけて順礼にも出られねば逢ふ事は夢に計り、覚めて考ふれば口をきかれなかつたはもしや流丸にでも中られて亡くなられたか、茶絶塩絶きつとして祈るを御存知ない筈も無かろうに、神様も恋しらずならあり難くなし、と愚痴と一所にこぼるゝ涙、流れて止らぬ月日をいつも〳〵憂ひに明し恨に暮らして我齢の寄るは知らねども、早い者お辰はちよろ〳〵歩行、折ふしは里親と共に来てまはらぬ舌に菓子ねだる口元、いとしや方様に生き写しと抱き寄せては放し難く、遂に三歳の秋より引き取つて膝下に育れば、少しは紛れて、貧家に温き日のあたる如く、淋しき中にも貴き笑の唇に動きしが、さりとては此子の愛らしきを見様とも仕玉はざるか、帰家れざるつれなさ、子供心にも親は恋しければこそ、父様御帰りになつた時には斯して為る者ぞと教へし御辞誼の仕様能く覚へて、起居動作のしとやかさ、能く仕付たと誉らるゝ日を待て居るに、何処の龍宮へ行かれて乙姫の傍にでも居らるゝ事ぞと、少しは邪推の悟気萌すも、我を忘れられしより子を忘れられし所には起る事、正しき女にも切なき情なるに、天道怪しくも是を恵まず、運は賽の眼の出所分らぬ者にて、お辰の叔父ぶんなげの七と諢名取りし蕩楽者、男は好けれど根性図太く、誰にも彼にも疎まれて、大の字に寝たとて一坪には足らぬ小さき身を広き都に置きかね、漂泊ありきの渡り大工、段〻と美濃路を歴て信濃に来り、折しも須原の長者何がしの隠居所作る手伝ひ、柱を削れ羽目板を付ろと棟梁の差図には従へど、墨縄の直なには傚はぬ横道、お吉様と呼ばせらるゝ秘蔵の嬢様にやさしげな濡を仕掛け、鉋屑に墨さしで思を云はせでもしたるか、とう〳〵そゝのかしてとんでもなき穴掘り仕事。それも縁なら是非なしと愛に暗むで男の性質も見分ぬ長者のゑせ粋、三国一の狼婿、取つて安堵したと知らぬが仏様に其年なられし跡は、山林家蔵縁の下の糠味噌瓶まで譲り受けて、村中寄合ひの席に肩ぎしつかせての

正坐、片腹痛き世や。

あはれ室香はむら雲迷ひ野分吹く頃、少しの風邪に冒されてより枕あがらず、秋の夜冷に虫の音遠ざかり行くも観念の友となつて独り寝覚の床淋しく、自ら露霜のやがて消ぬべきを悟り、お辰素性のあらまし顔ふ筆のにじむ墨に覚束なく認めて守り袋に父が書き捨の短冊一トひらと共に蔵めやりて、明日をもしれぬ我がなき後頼りなき此子、如何なる境界に落るとも加茂の明神も御憐愍あれ、其人命あらば巡り合せ玉ひて、芸子も女なり、優しき心入れ嬉しかりきと方様の一言、草葉の蔭に聞せ玉へと、遙拝して閉ぢたる眼をひらけば、燈火僅に螢の如く、弱き光りの下に何の夢見て居るか罪のなき寝顔、せめてもう十計りも大きうして銀杏髷結はしてから死にたしと袖を嚙みて忍び泣く時、お辰魘はれてワッと声立て、母様痛いよ〳〵、私の父様はまだ帰へらないかへ、源ちやんが打つから痛いよ、父の無いのは犬の子だつてぶつから痛いよ。オヽ道理じやと抱き寄すれば、其儘すや〳〵と睡るいぢらしさ。アヽ死なれぬ身の疾病、是ほどなさけなき者のあろうか。

下　子は岩蔭に咽ぶ清水よ

格子戸がら〳〵とあけて、閉る音は静なり。七蔵衣裳立派に着飾りて顔付高慢くさく、無沙汰謝るにはあらで誇り気に今の身となりし本末を語り、女房に都見物致させかたがた御近付に連て参つた、と大風なる言葉の尾につきて、下ぐる頭も低くしとやかに、妾めは吉と申す不束な田舎者、仕合せに御縁の端に続がりました上は何卒末長く御眼かけられて御不承ながら真実の妹とも思しめされて下さりませと、演る口上に樸厚なる山家育ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭をあげてよき程に挨拶すれば、女心の柔なる情ふかく、姉様の是ほどの御病気、殊更御幼少のもあるを他人任せにして置きまして、祇園清水金銀閣見たりとて何の面白かるべき、妾は是より御傍さらず御看病致しましよ、と云へば七蔵顔膨らかし、腹の中には余計なと思ひ乍ら、ならぬとも云ひ難く、それならば家も狭し、おれ丈ケは旅宿に帰るべしといつて、其晩は夜食の膳の上、一酌の酔に浮れてのそゞろあるき、鼻歌に酒の香を吐き、川風寒き千鳥足、乱れてぽんと町か川端あたりに止まりし事あさまし。

室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ぬる処を得て気も休まり、爰ぞ天の恵み、臨終正念違はず、安かなる大往生、南無阿弥陀仏は嬌喉に粋の果を送り三重、鳥部野一片の烟となつて御法の風に舞ひ扇、極楽に歌舞の女菩薩一員増したる事疑ひなしと、様子知りたる和尚様随喜の涙を落されし。お吉其儘あるべきにあらねば雇ひ婆には銭やつ

て暇取らせ、色〻片付るとて持仏棚の奥に一つの包物あるを、不思議と開き見れば様〻の貨幣合せて百円足らず、是はと驚きて能〻見るに、我身万一の時お辰引き取つて玉はる方へ、せめてもの心計りに細き暮らしの中より一銭二銭積み置きて、是をまゐらするなりと包み紙に筆の跡、読みさして身の毛立つ程悲しく、是までに思ひ込まれし子を育てずに置れべきかと、遂に五歳のお辰をつれて夫と共に須原に戻りけるが、因果は壺皿の縁のまはり、七蔵本性をあらはして不足なき身に長半をあらそへば、段〻悪徒の食物となりて痩せる身代の行末を気遣ひ、女房うるさく異見するに、何の女の知らぬ事、ぴんからきりまで心得て穴熊毛綱の手品にかゝる我ならねば、負くる計りの者にはあらずと駈出して三日帰らず、四日帰らず、或は松本善光寺、又は飯田高遠あたりの賭場あるき、負れば尚も盗賊に追ひ銭の愚を尽し、勝てば飯盛に祝ひ酒のあぶく銭を費す、此癖止めて止まらぬ春駒の足掻早く、坂道を飛び下るより迅に、親譲りの山も林もなくなりかゝつてお吉心配に病死せしより、齢は僅に十の冬、お辰浮世の悲みを知りそめ、叔父の帰宅ぬを困りて途方に暮れ居たるに、近所の人〻、彼奴め長久保のあやしき女の許に居続して妻の最期を余所に見る事憎しとてお辰をあはれみ助け葬式済せけるが、七蔵其後愈身持放埒となり、村内の心ある者には爪はじきせらるをもかまはず、遂に須原の長者の屋敷も空しく庭中の石燈籠に美しき苔を添へて人手に渡し、長屋門のうしろに大木の樅の梢吹く風の音ばかり今の耳にも替らずして、直其傍なる荒屋に住ひぬるが、さても下駄の歯と人の気風は一度ゆがみて一代なほらぬもの、何一ト つ満足なる者なき中にも盃のみは欠けず、柴木へし折つて箸にしながら象牙の骰子に誇るこそ愚なれ。

かゝる叔父を持つ身の当惑、御嶽の雪の肌清らかに、石楠の花の顔気高く生れ付てもお辰を嫁にせんといふ者、七蔵と云ふ名を聞ては山抜け雪流より恐ろしく、おぞ毛ふるつて思ひ止れば、二十を越して痛ましや生娘、昼は賃仕事に肩の張るを休むる間なく、夜は宿中の旅籠屋廻りて、元は穢多かも知れぬ客達にまで嬲られながらの花漬売、帰りは一日の苦労の塊り銅貨幾箇を酒に易へて、御淋しう御座りましたろう、御不自由で御座りましたろうと機嫌取りどり笑顔してまめやかに仕ふるにさへ時〻は無理難題、先度も上田の娼妓になれと七めの云ひ掛しよし。さりとては胴慾な男め、生餌食ふ鷹さへ嗟め鳥は許す者を。

第四　如是因

上　忘られぬのが根本の情

珠運は種々の人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世のあはれ今宵覚へて屋の角に鳴る山風の寒さ一段身に染み胸痛きまでの悲しさ、我事のやうに鼻詰らせながら亭主に礼云ひておのが部屋に戻れば、忽気が注は床の間に二タ箱買つたる花漬、衣脱ぎかへて転りと横になり、夜着引きかぶればあり〳〵と浮ぶお辰の姿、首さし出して眼をひらけば花漬、閉づればおもかげ、是はどうじやと呆れてまた候眼をあけば花漬、ア、是を見ればこそ浮世話も思ひの種となつて寝られざれ、明日は馬籠峠越えて中津川迄行かんとするに、能く休までは叶はじと行燈吹き消し意を静むるに、又しても其美形、エヽ馬鹿なと活と見ひらき天井を睨む眼に、此度は花漬なけれど闇はあやなしあやにくに、梅の花の香は箱を洩れてする〳〵と枕に通へば、何となくときめく心を種として咲もぬ咲たり、桃の媚桜の色、さて薄荷菊の花まで今真盛りなるに、蜜を吸はんと飛び来る蜂の羽音もどこやらに聞ゆる如く、耳さへいらぬ事に迷つては愚なりと瞼堅く閉ぢ、掻巻頭を蔽ふに、さりとては怪しからず麗しき幻の花輪の中に愛嬌を湛へたるお辰、気高き計りか後光朦朧とさして白衣の観音、古人にも是程の彫なしと好な道に恍惚となる時、物の響は冴ゆる冬の夜、台所に荒れ鼠の騒ぎ、憎し、寝られぬ。

下　思ひやるより増長の愛

裏付股引に足を包みて頭巾深々とかつぎ、然も下には帽子かぶり、二重とんびの扣鈕惣掛になし其上首筋胴の周囲、手拭にて動がぬ様縛り、鹿の皮の袴に脚絆油断なく、足袋二枚はきて藁沓の爪先に唐辛子三四本足を焼ぬ為押し入れ、毛皮の手甲して若もの時の助けに足橇まで脊中に、用意十二分にしてさへ此大吹雪は容易の事にあらず、吼立る天津風、山々鳴動して峰の雪、梢の雪、谷の雪、一斉に舞立つ折は一寸先見へ難く、瞬間に路を埋め脛を埋め、鼻の孔まで粉雪吹込んで水に溺れしよりまだ〳〵苦し、ましてや準備おろかなる都の御客様なんぞ命惜くば御逗留なされ、と朴訥は仁に近き親切。なるほど話し聞てさへ恐ろしければ珠運別段急ぐ旅にもあらず、されば今日丈御厄介になりましよ、と尻を炬燵に居て、退屈を輪に吹く煙草のけぶり、ぼんやりとして其辺見回せば、端なく眼につく柘植のさし櫛。扨は花漬売が心づかず落とし行しかと手に取るとたん、早や其人床しく、昨夕の亭主が物語今更のやうに思ひ出さ

れて、叔父の憎きにつけ世のうらめしきに付け、唯何となくお辰可愛く、おれが神仏なら七蔵頓死させて行衛しれぬ親にはめぐりあはせ、宮内省よりは貞順善行の緑綬紅綬紫綬、あり丈の褒章頂かせ、小説家には其あはれおもしろく書かせ、祐信長春等呼び生して美しさ十分に写させ、そして日本一大と尽の嫁にして、あの雑綴の木綿着を綾羅錦繡に易へ、油気少きそゝけ髪に極上と正真伽羅桁檀の油付さし、握り飯ほどな珊瑚珠に鉄火箸ほどな黄金脚すげてさゝしてやりたいものを、神通なき身の是非もなし、家財売て退けて懐中には猶三百両余あれど、是は我身を立る基、道中にも片足満足な草鞋は捨ぬくらゐ倹約して居るに、絹紋の半掛一トつたりとも空に恵む事難し、さりながらあまりの慕はしさ、忘られぬ殊勝さ、かゝる善女に結縁の良き方便もがな、噫思ひ付たりと、小行李とく〳〵小刀取出し、小さき砥石に鋒尖鋭く礪ぎ上げ、頓て櫛の棟に何やら一日掛りに彫り付、紙に包むでお辰来らばどの様な顔するかと待ちかけしは、恋は知らずの粋様め、おかしき所業あてが外れて其晩吹雪尚やまず、女の何としてあるかるべきや。

されば流れざるに水の溜る如く、逢はざるに思は積りて愈〻なつかしく、我は薄暗き部屋の中、煤びたれども天井の下、赤くはなりてもまだ破れぬ畳の上に坐し、去歳の春にすが漏したるか怪しき汚染は滝の糸を乱して画襖の李白の頭に濺げど、たて付よければ身の毛立程の寒さを透間に喞ちもせず、兎も角も安楽にして居るにさへ、うら寂しくて自悲を知るに、ふびんや少女の、あばら屋といへば天井も無かるべく、屋根裏は柴焼く煙りに塗られてあやしげに黒く光り、火口の如き煤は高山の樹にかゝれる猿尾柳のやうにさがりたる下に、あのしなやかなる黒髪引詰に結ふて、腸見へたるぼろ畳の上に、香露凝る半にして壁尚柔輭な繊細な身体を厭ひもせず、なよやかにおとなしく坐りて居る事か、人情なしの七蔵め、多方は小鼻怒らし大胡坐かきて炉の傍に、ア、憎さげの顔の見ゆる様な、藍格子の大どてら着て、充分酒にも暖りながら分を知らねばまだ足らず、炉の隅に転げて居る白鳥徳利の寝姿忌〻しそうに睨めたる眼ジロリと注ぎ、裁縫に急がしき手を止さして無理な吩咐、跡引き上戸の言葉は針、とが〳〵しきに胸を痛めて答ふるお辰は薄着の寒さに慄ふ歟唇、それに用捨もあらき風、邪見に吹くを何防ぐべき骨露れし壁一重、たるみの出来たる筵屏風、あるに甲斐なく世を経れば、貧には運も七分凍りて三分の未練を命に生るか、噫と計りに夢現分たず珠運は歎ずる時、雨戸に雪の音さら〳〵として、火は消ざる炬燵に足の先冷かりき。

第五　如是作

上　我を忘れて而生其心

よしや脊に暖ならずとも旭日きら〳〵とさしのぼりて山山の峰の雪に移りたる景色、眼も眩む計りの美しさ、物腥き西洋の塵も此処までは飛で来ず、清浄潔白実に頼母敷岐蘇路、日本国の古風残りて軒近く鳴く小鳥の声、是も神代を其儘と詰らぬ者にも面白く感ずるは、昨宵の嵐去りて跡なく、雲の切れ目の所と青空見ゆるに、人の心の悠々とせし故なるべし。珠運梅干渋茶に夢を拭ひ、朝飯平常より甘く食ひて、泥を踏まぬ雪沓軽く飄々と立出しが、折角吾志を彫りし櫛与へざるも残念、家は宿の爺に聞て街道の傍を僅折り曲りたる所と知れば、立ち寄りて窓からでも投込まんと段々行くに、果せる哉樅の木高く聳へて外囲ひ大きく、如何にも須原の長者が昔の住居と思はるゝ立派なる家の横手に、此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに中の様子を伺へば、寥然として人のありとも想はれず、是は不思議と、やぶれ戸に耳を付て聞けば窸々と囁やくやうな音、愈あやしく尚耳を澄ませば啜り泣する女の声なり。

さては邪見な七蔵め、何事したるかと彼此さがして、大きなる節の抜けたる所より覗けば、鬼か悪魔か言語道断、当世の摩利夫人とさへ此珠運が尊く思ひし女を、取つて抑へて何者の仕業ぞ、酷らしき縄からげ、後の柱のそげ多きに手荒く縛し付け、薄汚なき手拭無遠慮に丹花の唇を掩ひし心無さ、元結空にはじけて涙の雨の玉を貫く柳の髪の恨は長く垂れて顔にかゝり、衣引まくれ胸あらはに、膚は春の曙の雪、今や消入らん計り。見るから忽ち肉動き肝躍つて分別思案もあらばこそ、雨戸蹴ひらき飛込んで、人間の手の四五本なき事もどかしと焦燥まで忙しく、手拭を棄て縄を解き、懐中より櫛取り出して、乱れ髪梳けと渡しながら冷へ凍りたる肢体を痛ましく、思はずしかと抱き寄せて、嘸や柱に脊中がと片手に摩で擦するを、女あきれて兎角の詞はなく、ヂット此方の顔を見つめるにきまり悪くなつて一ト足離れ退くとたん、其辺の畳雲だらけにせし我沓にハッと気が注き、訳も分らず其まゝ外へ逃げ出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてよろ〳〵〳〵、あはや膝突かんとしてドッコイ、是は仕たり、蝙蝠傘手荷物忘れたかと跡もどりする時、お辰門口に来り袖を捉へて引くにふり切れず、今更余計な業仕たりと悔むにもあらず恐るゝにもあらねど、一生に覚なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑なんぞの詰らぬ者に眼を注ぎ上り端に腰かければ、しとやかに下げたる頭よくも挙げ得ず、あなたは亀屋に御

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com